

『御靈によって生まれる』 ヨハネの福音書 3章 1~10 節

1. まことに、まことに

ヨハネの福音書 3章は、1~21 節と 22~36 節の二つに分けることができます。この 3 章の記事は、他の三つの福音書には書かれてはいません。前半部は、ニコデモという人物の記事があります。後半部は、再びバプテスマのヨハネのことが取り上げられています。

本日は、前半の始めのところを学んでいきます。私たちの誰もが、新しくなりたい、新しくやり直したい、という思いを持っています。そういう意味で 2026 年の始めに色々な目標を持つことがとても大切です。イエス様は、3 節で「まことに、まことに、あなたに言います。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」と言われました。新しく生まれること、生まれ変わって新しく生きることが人間には必要なだとイエス様は言されました。私たちもそのことを願っているのです。

ここに「まことに、まことに」という言葉があります。これはヨハネの福音書に特徴的なイエス様の言葉です。1 章 51 節にも「まことに、まことに、あなたがたに言います。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたは見ることになります。」と語られていました。この言葉の原文には「アーメン」という言葉が二度繰り返されています。「アーメン」というのは、「本当にその通り、しかり」という強い肯定の言葉です。イエス様はその言葉を二度繰り返した上で、「あなたがたに言います」と言ったのです。これから言うことは大事なことだからよく聞きなさい、という感じでイエス様は「あなたがたに言います」と言ったのです。その言葉があって、「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」と言われているのですから、これはとても大事なこと、イエス様が私たちにぜひとも伝えたいと思っておられることです。

2. 神の国に入るには

「新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません」とありますが、この「見る」は、傍観者として「眺める」ことではありません。5 節にも「まことに、まことに、あなたに言います。」が語られていますが、そこには「人は、水と御靈によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。」とあります。「神の国」はただ外から眺めているものではなくて、「入る」べきものです。「神の国」を「見る」とはそこに「入ること」なのです。「神の国」は、そこに入らなければ意味がないのです。それこそが救われることだからです。だからあなたがたは、「神の国」に「入るために、新しく生まれることを熱心に追い求めなさい、とイエス様は言っているのです。

ここに「新しく」と訳された言葉は、「上から」という意味があります。「上」とは神ご自身のことを指しています。つまり、「人は、神によって生まれなければ、神の国を見ることが出来ない」というのです。というのは、聖書で言う救いとは、単に良い人間になろうとすることとは違うからです。一般に良い人間になろうとすることは、人間の努力や教育によって進歩することを意味しますが、新しく生まれるというのは、神のいのちである聖霊を受け入れ、聖霊が自分の内に住んでくださることを意味しているからです。

「神の国に入る」ということを私たちは普通、死んだ後地獄ではなくて天国に行くことだと思っています。恐ろしい地獄ではなくて天国、「神の国に入る」ために、今この地上の人生においてできるだけ良いことをするように教えてくれるのが宗教だ、と世の中の多くの人が思っています。しかしイエス様が「神の国に入る」ということで言っておられるのは、そういうこととは違います。イエス様が言っておられることは裏返して言えば、「あなたは水と霊とによって新しく生まれるなら、神の国に入ることができる」ということです。新しく生まれるなら、あなたは今すぐにも「神の国に入る」ことができる、と言っているのです。

3. ニコデモ

そんな「神の国」何てよく分からない、と私たちは思います。まさにそのように思った人が、ニコデモという人です。

この人は、1節に「**パリサイ人**」でした。「**パリサイ人**」はユダヤ人たちの中でも、宗教的な指導者でした。神からの捷である律法を研究し、それに厳格に従って自分自身も生きており、一般の人々に律法に従って生きることを教えていたのが「**パリサイ人**」です。当時のユダヤ人にとっての聖書、それは私たちで言う旧約聖書ですが、その聖書に精通していた人です。そして彼は同時に「**ユダヤ人の議員**」でした。ユダヤ人の議会は、サンヘドリンと呼ばれていたユダヤの最高議会のことです。祭司や長老、学者たち等71人で構成されていました。そこでは政治的なことだけでなく、宗教的なことも含め、すべてのことがここで議決されていました。彼はその議員だったのです。つまり、彼は当時のユダヤ人としては最高の社会的地位と名誉、そして、財産の持ち主であったということです。

ニコデモは、そのように宗教的にも政治的にも高い権威と地位にいた人だったわけですが、そのニコデモがある夜、イエス様を訪ねて来たのです。「**夜**」というのは人目を忍んで、ということでしょう。彼は目立たないようにこっそりとイエス様のもとに来たのです。というのは、ヨハネの福音書19章39節にもニコデモのことが記されていますが、そこにも「**以前、夜イエスのところに来たニコデモも、没薬と沈香を混ぜ合わせたものを、百リトラほど持つてやって来た。**」と、彼が「**夜**」イエス様のもとにやって来たことが強調されているからです。それが彼の特徴でした。彼はそこまでしてイエス様のもとに行こうとしたのです。

この時彼はすでに確固たる地位を築いていました。名誉もありました。そんな彼が若いイエス様のもとに教えを受けに行くということには相当抵抗もあったことでしょう。そのような彼の姿が、「**夜イエスのところに来た**」ということで表されているのです。しかし、彼はそれでもイエス様のもとにやってきました。それは、彼がそれほど真剣に救いを求めていたからです。このような求道心こそ、私たちが救われるために、また、救われてイエス様をさらに深く知っていくために必要なことなのです。

そして2節「**先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられなければ、あなたがなさっているこのようないしは、だれも行うことができません。**」と言いました。彼はイエス様を律法の教師の一人として尊敬をもって「**先生**」と呼びかけています。大工の子であったイエス様を「**先生**」と呼ぶのは異例です。それは、イエス様の行ったしるし、つまり奇跡のゆえです。2章23節に「**過越の祭りの祝いの間、イエスがエルサレムにおられたとき、多くの人々がイエスの行われたしるしを見て、その名を信じた。**」と語られていました。彼はそれを見て、イエス様は神から遣わされた教師だと信じて、その教えを聞こうとして来たのです。23節の後半に「**多くの人々がイエスの行われたしるしを見て、その名を信じた**」とありますが、ニコデモはまさにその一人だったのかもしれません。

4. 新しく生まれるとは

そのニコデモに対してイエス様は、3節で「**まことに、まことに、あなたに言います。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。**」と言われたのです。しかしそのイエス様の言葉が、ニコデモには分かりませんでした。4節で彼は「**人は、老いていながら、どうやって生まれることができますか。もう一度、母の胎に入つて生まれることなどできるでしょうか。**」と言っています。彼はユダヤ教の教師でありながら、イエス様が言わせたことを全然理解できませんでした。彼は「**新しく生まれる**」ということを耳にしたとき、赤ちゃんとして生まれてくるあの肉体の誕生のことしか考えられなかったのです。

イエス様が「**新しく生まれなければ**」と言ったのは、もう一度お母さんのお腹から生まれて来なさいということではなくて、もっと精神的な意味であることが分からないのだろうか、と思うのです。でもだからといって、私たちにその精神的な意味が分かるのでしょうか。新たに生まれて「**神の国に入る**」とはこういうことだよと説明できるでしょうか。私たちも、「**新しく生まれる**と言わてもよく分からない」ということにおいて、ニコデモと大して変わりはないと言わなければならないでしょう。ニコデモは、新しく生まれることによって「**神の国に入る**」ということが分からない私たちの代表なのです。

ニコデモも、私たちも、新しく生まれるというイエス様の言葉が分からぬのはなぜなのでしょうか。どうしたら私

たちはこの御言葉が分かるようになる、つまり新しく生まれて「神の国に入る」ことができるようになるのでしょうか。そのヒントを語っているのが6節の言葉です。「肉によって生まれた者は肉です。御靈によって生まれた者は靈です。」とイエス様は言いました。「肉によって生まれた者」と「靈によって生まれた者」とが対称的に並べられています。「靈によって生まれた者」とは、「水と御靈によって生まれた者」でしょう。それに対して「肉によって生まれた者」とは、まだ靈によって新しく生まれていない、古いままの私たちです。元々の、生まれつきの私たちは「肉によって生まれた者は肉です」といことです。「御靈によって生まれた者は靈である」というのは、「肉によって生まれた者」である生まれつきの私たちはどこまで行っても肉なのであって、靈によって新しく生まれることが分からず、ということです。靈によって新しく生まれることが分かるのは、「靈によって生まれた者」です。「靈によって生まれた者」、「水と御靈によって生まれた者」だけが、靈のことが分かる。靈によって新しく生まれることが分かるのです。つまり、靈によって新しく生まれることは、靈によって新しく生まれなければ分からず、とイエス様はこの6節で言っているのです。靈によって新しく生まれなければ、靈によって新しく生まれることは分からずだとしたら、生まれつきの、肉である私たちは、靈によって新しく生まれることをいくら分かろうと努力しても分からずということになります。それでは、靈によって新たに生まれることを、そして「神の国に入る」ことを求めていくすべがないではないか、と思うわけです。

ニコデモは、宗教的にも政治的にも、ユダヤ人たちの先頭に立っていた指導者でした。当時のユダヤ人たちの中で最高の学識を持つと共に、神の御言葉である律法をしっかりと学んでいた人だったのです。人間が頑張って得ることができるものを見つけるのを彼こそは得ていたし、人間の努力によって到達することができる境地に、彼こそは到達していたのです。その彼が、「人は、新しく生まれなければ、神の国を見るすることはできません。」というイエス様の言葉が理解できなかったのです。何のことか分からなかったのです。だとしたら、私たちがどうにかすればそれが分かるようになるとか、努力して少しづつ新しく生まれ変わっていくことができる、などということはあり得ないのです。

5. 風と靈

それでは私たちは、新たに生まれて「神の国」に入るために、つまり救われるためにつなげること、なすべきことは何もないのでしょうか。「靈によって生まれる」という不思議な出来事がたまたま起ることをただぼんやり待っているしかないのでしょうか。イエス様は、そこで大切なことを7~8節で「あなたがたは新しく生まれなければならぬ、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません。風は思いのままに吹きます。その音を聞いても、それがどこから来てどこへ行くのか分かりません。御靈によって生まれた者もみな、それと同じです。」と語って下さいました。イエス様はここで「風」を例えに用いて語りました。その「風」という言葉は「靈」とも訳すことができます。欄外に「風と靈とは共通するところがあるのです。」と書かれています。何が共通しているのでしょうか。私たちは、「風」そのものを見る事はできません。「風」がどこから吹いてきて、どこへ吹いていくのかを知ることはできないし、それをコントロールすることはできません。「風」は私たちの思いや予測や常識を超えて、また私たちの努力とは関係なく、自由に吹いて来るのです。そこが、「風」と「靈」との共通するところです。「靈」、「御靈」も目に見えないし、私たちの予測や常識を超えて、また私たちの努力とは関係なく自由にその御業をなさるのです。しかし、私たちは目に見えない「風」の「音」を聞くことができます。その「音」という言葉には「声」という意味もあります。「風」の「音」が聞こえることが、「御靈（聖靈）」が語りかける声が聞こえて来ることと重ね合わされているのです。目には見えないし、予測できない、また私たちの努力とも関係なく、しかし確かに生きて働いておられる聖靈が、私たちに語りかけて下さり、そして私たちを確かに新しく生まれ変わらせて下さるのです。「靈によって生まれた者」として下さるのです。「風」のように吹いて来るこの聖靈を信じて、求めなさいとイエス様は言っておられるのです。

6. 聖靈の働き

「御靈（聖靈）」が自分を生まれ変わらせ、新たに生きる者として下さることを信じて祈り求めること、新しく生ま

れて「神の国に入る」ために私たちに出来るのはこのことだけです。しかし、このことがあるかないかは決定的な違いです。ニコデモは、このイエス様の言葉を聞いてもなお9節で「どうして、そのようなことがあり得るでしょうか。」と言っています。御靈の自由な働きによって自分が新しくされ、生まれ変わることを信じることができないのです。そのニコデモは、イエス様に「あなたはイスラエルの教師なのに、そのことが分からぬのですか。」と叱られてしまいました。神の民であるイスラエルにおいて、アブラハムを始めとするイスラエルの先祖たちを選び、その旅路を導き、ご自分の民として下さったのは御靈の御業ではないか。エジプトでの奴隸の苦しみの中にあったこの民が、モーセを通して行なわれた数々の奇跡によって救い出され、約束の地カナンへと導かれたのも、また国を滅ぼされバビロンに捕囚となっていた民をこの地に連れ帰ったのも、すべて「御靈（聖靈）」の働きではなかったのか。人間の思いや計画や努力を超えて自由に御業を行なう御靈によって導かれてきたのが神の民イスラエルではないか。神の靈が吹くなら、枯れた骨も復活し、新しく生きる者となることを、あのエゼキエルの預言も語っているではないか。この御靈の御業を信じることが、主なる神を信じる信仰の基本であり、そこに、あなたが新しく生まれ変わり、「靈によって生まれた者」とされる希望があるのだ。そのようにイエス様は言っておられるのです。

私たちも、この信仰の基本を見失わないようにしなければなりません。ニコデモが、「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません」というイエス様の言葉を受け止めることができなかつたのは、彼がイエス様の教えをしっかりと聞いていなかつたからではありません。彼はイエス様が「神のもとから来られた教師である」と信じて、その教えを聞きに来たのです。また彼の信仰における知識や努力が足りなかつたからでもありません。彼は聖書について、当時の人々の誰よりも深い知識を持っており、また神に従って生きようと熱心に努力していました。しかし彼には欠けていたことがあつた。「御靈」が御業を行なつて下さるなら、自分が新たに生まれ変わることができる、新しく生き始めることができる、ということを信じて求めることが彼には欠けていたのです。そしてそれこそが、信仰をもつて生きるために決定的に必要なことだったのです。「御靈」の働きによって自分が新しくされること、変えられることを信じることなしに何をどう努力しても、たとえイエス様のことを尊敬し、一生懸命良い行いに励んでも、私たちは新たに生まれることはできないのです。「神の国に入る」ことはできないのです。救いにあづかることはできないのです。

新しい年を迎えた私たちは、新たに歩み出したいと願っています。その私たちにイエス様が今問いかけておられるのは、あなたは本当に新しくなることができる。「御靈」は、あなたを本当に新しく生まれ変わらせ、新しい人生を生きる者とする、そのことをあなたは信じるか、ということです。「御靈」がその自由な御業を行なつて下さるなら、私たちは本当に新しく生まれ変わることができます。「靈によって生まれた者」とされるのです。「神の国」、イエス様の恵みのご支配の中を生き始める能够性なのです。必要なことはただ一つ、「御靈」の自由な働きを信じて祈り求めることです。その信仰と祈りに生きる新しい年でありたいのです。

そしてもう一つ、イエス様は「人は、水と御靈によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。」と言いました。私たちが新しく生まれるのは「御靈（聖靈）」の働きによってですが、イエス様はそこに「水と」を付け加えています。それは洗礼における「水」です。「御靈」によって生まれ変わり、新しく生きていくことが、洗礼を受けることと結び合わされているのです。

エペソ5章26節に「キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもつて、教会をきよめて聖なるものとするためであり、」とあります。「キリストがそうされたのは」の「そうされた」とは、イエス様が十字架で死なれたことを指していますが、イエス様が十字架で死んでくださったのはいったい何のためだったのでしょうか。それは、「みことばにより、水の洗いをもつて、教会（私たち）をきよめて聖なるものとするため」でした。ここでは「みことば」が「水の洗い」のことを示しているのは明らかです。ですから、この「水と御靈によって生まれなければ」というのは、人は神の「みことば」を受け入れ、イエス様を罪からの救い主として信じるなら、神の御靈によって新しく生まれるのです。洗礼において私たちは、「水と御靈によって」新しく生まれ、「神の国」のご支配の中で生きる者とされるのです。